

大船渡の風雲児

高橋 真己子

「このまち平凡すぎて嫌いだったんですよね」そう言って苦笑いを浮かべるのは、キャッセン大船渡で「ANOTHER WORLD BAR KEIJI」を営む佐藤圭二さんだ。「だから自分がここで商売するとは思わなかった」と彼は続ける。一時的に帰郷していた圭二さんが、飲食店を開業するため東京へ戻ろうとしていた矢先に発生した東日本大震災。すっかり変わってしまった故郷の景色を目の当たりにし「いま、この地から出ていくのは違う」と思った圭二さんは、同じ思いだった弟さんとその年の暮れ、飲食店を開くことを決意する。

五年間「沖縄風居酒屋ゆめんちゅ」を営む中、彼に変化が生まれる。それから年を重ねるごとに、まちを好きになっていったのだという。「このまちが平凡ではないことに気づいたんですよね」と彼は語る。嫌いなまち、嫌いな故郷、そこにいざ店を開いたことで、これまで見えなかった、いや、見ようとしなかった、地元の様子、人間、自然、さらにこの地を訪れてくれる市外、県外の人、その全てが世界に誇るべき非凡な景色として面白く目に映ってきたのだ。そんな気持ちの変化は、圭二さんがそもそも持ち合わせていた想像を現実にする才能をあらわにさせた。キャッセン大船渡に「ANOTHER WORLD BAR KEIJI」計画が誕生した瞬間である。

「大船渡の異空間」「大船渡のもう一つの世界」をコンセプトにしたその店は、エントランスから不思議な雰囲気だ。大きく歪んだ鏡のような扉を開けると目の前に広がるのはアニメのフィギュア、奇妙な置物、グリーン、よくわからないどこかの民族グッズ、雑多なBGM。

時空を超越した空間に、初めて来店する客のほとんどが目を丸くし店内を散策する。オリジナルカクテルのネーミングも一言で言うと変だ。例えば「俺の小宇宙（コスモ）」は燃え上がる味なのか。「これはどんなカクテルだろう」

「どんな味だろう」と客はメニューに目を見張る。そんな景色を、この異空間の案内人である圭二さんは「してっやったり」とほくそ笑んでいる。そして一度訪れたが最後、この変な店、気持ちの悪い店に幾度となく迷い込んでしまうのだ。ちなみに彼にとって「変な店」「気持ちの悪い店」は最上級の褒め言葉である。

店を経営する傍ら、圭二さんは様々なイベントを開催している。今や「大船

渡のイベントに佐藤圭二あり」といった具合だ。コンテンツはアニメ、怪談、UFOにUMAと実に彼らしい。そしてそれら全てが大船渡、気仙に関わりがあるものを土台にしている。「違う視点からこの地の魅力を引き出して、違う見せ方をしたい」「何でこんな地方のまちで、不思議な、ふざけたイベントをやっているのだろう。行ってみたいと思わせるきっかけを作りたい」と故郷への愛を熱く語る圭二さんだが、ふと言う。「このまち、三分の一はまだ平凡で嫌いなんですよね」

【まちおし AWARD 添削プログラムを受けての感想】

職業柄、また、日頃の活動上文章を書くことが多いため、自分の中で「文章を書くことに慣れている」と思っていたことが慢心であったと、今回のまちおし AWARD 及び添削プログラムを受けて痛いほどわかりました。

句点の打ち方や、「てにをは」の使い方、そしてなにより身近な人を文章で表現するという難しさに苦戦しました。今回私は、自分の恩人であり、ともにまちの魅力発信のために活動している尊敬すべき人について書きました。

知っている人だからこそ終始抽象的な書き方になってしまっていることを、講師の方のご指摘で気づきました。文章を修正しながら、あらためてその人を知ること、理解することができました。

今後また、このまちのおしたい人物を書くことがあったら、きっと知っている人物を取り上げると思います。紹介したい人がこのまちには数多いからです。その時には今回の学びを忘れず、常に客観的に対象者を捉えて表現できるよう努めたいです。

高橋 麻己子